

明石海峡大橋全通記念事業「とくしま剣山ミステリーツアー」

企画までの経緯

1998年、本州と四国を繋ぐふたつ目の橋、明石海峡大橋が完成しました。その3年前には、徳島県庁内に「全通記念事業局」ができ、某大手広告代理店が全通記念イベントの一切を受注しました。

当社にはその代理店から、徳島全県（すべての市町村）でイベントを開催するので、その企画を提案するよう依頼がありました。（当社以外にも2〜3社に同じような依頼があったようです）

まずは徳島県の歴史・文化・芸能・産業・自然などを学ぶと同時に、様々な情報を収集してそれぞれの場所に相応しい企画を提案しようと、現地を1週間ほど訪れ、各地を見て回りました。

東京の人にとっては徳島と云っても、「阿波踊り」くらいしかイメージが浮かばない人も多いようなところ です。当社からはそれぞれの市町村というより、特徴のある地域別に約30のイベント企画を提案致しました。

当社から提案した企画のうち、5つほど企画は採用されたのですが、当社の規模からいってすべてを実行するのは難しいだろうと、代理店担当者と話し合っ て、最終的には2イベントを実施運営することとなりました。そのひとつが「とくしま剣山ミステリーツアー」副題・平家落人伝説です。



企画立案作業

県が主催する開通記念イベントのため、「全市町村で開催する」必要がある、という前提がありました。徳島の中でも祖谷地方というのは「日本三大秘境」と云われるほどの僻地ですから、平家の落人が隠れ住んだのでしょ う。そんな場所でも何かイベントを開催しなければならないのです。

県の担当者でさえ、小学校の時に遠足で行ったきり行ったことがない、というほどです。国道といっ ても急峻な斜面を削って作った道路ですから1車線しかありません。対向車が来れば、どちらかがすれ違 うことができるコーナーまでバックしなければならないのです。しかも地元の生活道路ですから、何か イベントでも開催してたくさんの人 が来たら、たちまち交通渋滞を引き起こしてしまいます。

そのため、イベント開催にしては内々に異例の注文が つきました。「できるだけ一時に、集中して人が来ないイベントを開催する」、何か変ですが、仕方がありません。

ただ、企画者としては、面白いもの をしたい、この場所 でしか出来ないもの をしたい、という思いが ありますから、祖谷地方（池田町、山城町、西祖谷村、東祖谷村）をまわり、地元の歴史、文化、伝統行事、伝説、遺跡等を 尋ね、資料を読んで、「平家の落人伝説」と現地にたくさん残っている「遺跡（古い民家）や遺品・資料」を利用するしかないと確信しました。

しかし、単に「平家落人伝説を巡る旅」をしても、一部の歴史好きの方を除いて何の面白みもありません。そこで、それぞれの遺跡ポイントで謎を解きながら旅を進める「ミステリーツアー」なら、一人でも、家族でも、友人と参加しても面白いのではないかと考えました。

そして、開催期間を夏休み中（43日間）とすることで、一時に集中して人が集まること無く、ある程度の参加者を集めることができ、地元にもメリットがある（宿泊、食事、土産、入場料）イベントにすることができます。

具体的な企画制作

この企画に興味を持って参加してもらう為に、平家伝説を1冊のマンガにして読んでもらい、その中から謎を解いてもらうことを考えました。

そのマンガを制作するにあたり、県の方からぜひ徳島出身で数々のヒット作品を輩出させた竹宮恵子（現京都精華大学教授）さんを起用して欲しいとの要望がありました。

偶然、わたくしが大学卒業後から所属していたラグビー部の会社が、彼女が描いた作品を数多く出版している出版社であったため、友人（元竹宮氏担当）を通して紹介をしてもらいました。まずマネージャーに電話で概要を説明し、執筆の依頼をしました。が、当時、毎週の連載を2本、毎月の連載を1本抱えていた為、とても無理です、とあっさりと断られてしまいました。

それですんなりと引き下がったのでは、今までの準備がすべて無駄になってしまうばかりか、県の総合計画自体を変更しなければならないことになり、大変な作業になってしまいます。

そこでわたくしはまず、彼女の膨大な作品をできるだけ読んで、彼女と会話できる同じ土俵に立とうと考えました。それから約1ヶ月、日常の仕事をしながら5〜60冊以上は読んだと思います。それでも全作品の半分くらいですが。そして、祖谷地方の関係書籍、平家伝説関係の部分をまとめて資料を作り、とりあえず話だけでいいので聞いて欲しいとマネージャーに依頼し、自宅兼アトリエにお伺いしました。彼女もマネージャーも最初から断る予定でいたのは分っていましたから、とにかく引き受けられる条件を出して欲しいとお願いし、条件を出してもらいました。それがどんなに厳しい条件でも、それが満たされれば彼女は描くしかないのですから、条件を出してもらった時点で成功といえます。



2年間に渡る仕事が終わってから聞いたのですが、わたくしがあれだけ多くの彼女の作品を読み、マンガ「日本歴史シリーズ」の中で、彼女が「吾妻鏡」を担当して描いていたので、その前書きの部分を描いて欲しいとお願いしたことや、祖谷地方の資料や平家伝説の資料をあまりにもたくさん持っていったこと、その他執筆料や印税等の無理と思われる条件を、わたくしが簡単に大丈夫です、と言った為に断る理由がなくなってしまった、とおっしゃっていました。

大きな目的を達成する為には、小さな障害を気にしていいたら出来ないのが常ですが、今回もまさにその通りでした。

竹宮氏が執筆して下さることが決定すると、地元徳島では新聞やテレビで取り上げられ、わたくしが彼女とアシスタント、マネージャーを案内して現地調査に出かけた折には、わたくし達のスケジュールが前日からテレビで放映されていた為、どこへ行っても大歓迎を受けました。

この企画のメインはあくまでも竹宮氏のマンガではありますが、「ミステリーツアー」として構成するには、どのようなミステリーを展開し、問題をどうするのか、それを解く為のヒント作りや、さまざまな仕掛けも重要な意味を持ってきます。そのため、映画やテレビでミステリーストーリーを構成したり、それらを解く為のクロスワードパズルを専門に作っているグループに依頼し、まずは竹宮氏の原作を読んでもらい、現地を見ながらどのような謎を作り、それを解く為のパズルをどのように作れば面白いのか、何種類もパターンを変えて問題を作ってもらいました。

難しすぎても解けないし、簡単すぎではつまらない、問題ひとつ作るのもかなりの作業量でした。しかもクライアントは県ですから、公務員の人達を相手に説明・折衝作業が毎日続きました。

ツアー開始とその後

準備期間が2年間もありましたから、その間に祖谷地方の道路はかなり整備され、ツアーが開始した頃には当初予想した交通渋滞は回避されたようです。また、地元市町村の人達や旅館・土産品店の方々も積極的に協力していただけだったので、運営作業はスムーズに進行しました。

このイベントを事前に全国的に知ってもらう為に、小学館のベストコミックシリーズである「ビッグコミックの月刊誌・ビッグコミックゴールド」に5ヶ月に渡り連載をし、ミステリーツアー開催の予告も入れました。それ以外にも、竹宮氏の関係で「主婦と生活社」「角川書店」「ぴあ」「弘済出版社」等の出版社のマンガ誌・女性誌・旅行誌担当者をプレツアーに招待して、「誌上体験ミステリーツアー」を掲載してもらいました。

大阪・神戸・岡山・徳島・高松を中心としてJR駅にB1ポスターの掲出や、JTB・近畿日本ツーリストでパッケージツアーを組んでもらったり、池田町から1日でチェックポイントを回れる特別バスを運行してもらったりもしました。

こうしたことも影響してか、ツアー参加者は予定（内々では1000人も来ればいいんじゃないかと云われていた）を大幅に上回り、6000人（家族では1冊しか申し込まないので実際には8000名以上と思われる）を越えるビッグイベントとなりました。

コースのチェックポイントには、平家の「赤旗」をイメージさせる大きなのぼり（何本も盗難にあいました）を立てて、雰囲気盛り上げると同時に、個人参加の人でもすぐに分るようにし、チェックポイントでの問題提示は、江戸時代の「お触れ書き」と同じような木のものにして、いかにも「ミステリーツアー」に参加している気分を大切にしました。

参加者からの感想文にも、すごく楽しめたというものが多く、次年度からも毎年開催して欲しい、という要望もかなりありました。



感想

企画から実施運営終了まで約3年、すっかり祖谷通になりました。地元の人達もこのイベントに協力したことと、副読本である竹宮氏の「平家落人伝説・まぼろしの旗」を読んで、先祖から何となく聞いていた話がすごく身じかに感じられて、本当によかったという感想を多く聞きました。また、マンガの内容が素晴らしいということで、地元の小中学校の副読本としても採用され、余分に制作してあったものを寄付することになりました。イベント終了後も、地元から竹宮氏に単行本の表紙に描かれたイラストやポスターに使用されたイラストを、お土産物やイベントで使わせて欲しいとの要望が出、竹宮氏も快く無料で使用許可を出されていたのも嬉しいことでした。

このイベントも、当社の方針のひとつ、「村興し・町興し」に役立つことができたとともに、主催者からも、地元の協力者からも、参加者からも喜んでいただき、忘れることの出来ないイベントとなりました。



「とくしま剣山一気登りマラソン大会」

全通記念イベントではたくさんのイベントが開催されましたが、その後も毎年開催されているのが、当社が同時に手掛けた「剣山一気登りマラソン」です。

そのお手伝いに毎年徳島に出かけるのですが、その時には、当時のメンバーが全員集まって同窓会を開き、昔話に花を咲かせています。イベント終了から既に5年が経過していますが、担当代理店を超えて一緒に苦労した仲間が集まり、酒を酌み交わす楽しみは何ものにも替えられない喜びです。通常、イベントが終了すると、あとには何も残らないのですが、今回は竹宮氏のマンガ単行本と主催担当者との友情が残りました。たくさんの仕事をこなしてお金をたくさん稼ぐより、数少ない仕事を大切に作り育て、信頼と友情をひとつずつ増やしていきたい、とこれからも考えています。

